

## 第 21 話 江戸幕府の衰運

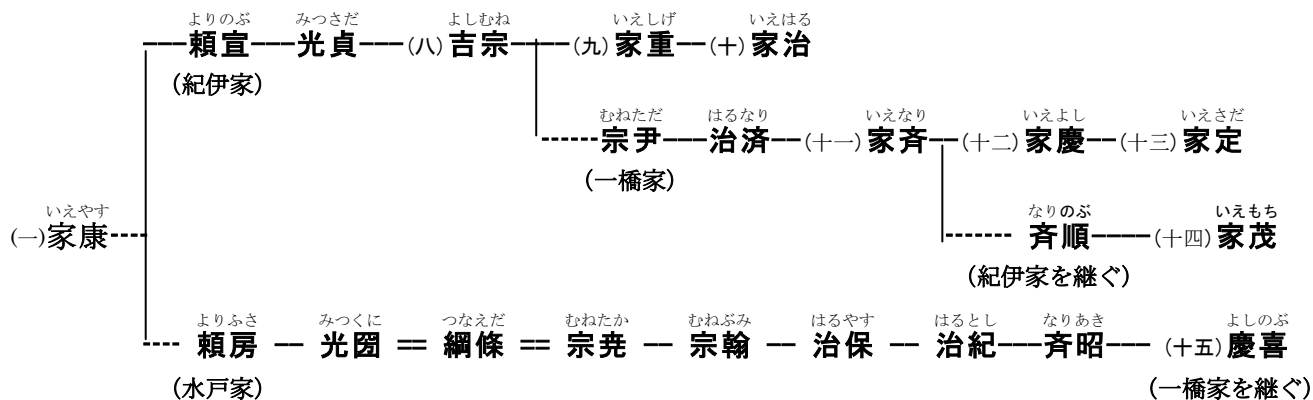
ちよくじょう たが 勅 諭に違たがった上に、いえもち 幼将軍家茂なおすけを立てて、直弼なおすけがいよいよ非難攻撃の的となる。  
いっそう ついに、断然、反対派のいっそう一掃を決心して非常手段あんせい たいごくに訴える。安政の大獄。  
かえ しかし、却かえって志士の憤激ふんげきを招いて、桜田門外にはかない最後を遂げる。  
とみ おとろ 幕府の威信が頓とみに衰おとろえる。

これより先き、幕府に將軍の世嗣問題よつぎが起こっていたことは、前にも少し述べたが、この問題も頗るすこぶ紛糾ふんきゆうした。

### 將軍の世嗣問題

いえさだ きよじゃく 十三代將軍家定は、虚弱しやくじやくで、子が無かったので、一門のうちから然るべき人を世嗣に迎えなければならなかった。この頃、水戸のなりあき齊昭ひとつばしよしのぶの子のちやう一橋慶喜すでは年も長じて既に22才となり、賢明の聞こえが高かったので、諸大名の多くはこれを立てて、折から、内外多事の幕府の威信を重くして、天下の人心を一つにしたいと望んでいた。

ところが、なりあき かげき じやういろん きら齊昭の過激な攘夷論を嫌っていた一派の者は、その子のよしのぶ慶喜を迎えることを喜ばなかった。將軍家定もこれを好まなかったらしいが、殊に幕府の大奥では慶喜を嫌っていた。彼等は紀伊家の家茂きい いえもちを迎えて世嗣にしようとした。家茂は時に13才の少年でしたが、家定の従弟で、血統が慶喜よりも近かったのです。



### 直弼の家茂樹立

こうして慶喜を迎えようとする所謂一橋派と、家茂を立てようとする所謂紀伊派とが、2つに分かれて、互いにその運動を蔭に陽に日に日に烈しくしていた時に、井伊直弼はにわかにならぬ大老職に任ぜられたのですが、彼はもともと外交の事に就いては齊昭と反対の意見を持っていたし、又、もとより紀伊派でもあったので、就職早々、久しい間の難問題であった通商条約の調印を済ますと、尋いで5日後の6月25日に、幼少の家茂を迎えて將軍の世嗣とした。しかも、すぐその翌月6日に家定が薨じたので、家茂は立って第十四代の將軍となった。

すでに勅諭に違った上に、今また衆議にそむいたのですから、直弼の専断を責める聲はますます高く、天下の志士は東西に奔走したが、わけても京都に多く集まって、親王、公卿に直弼の不法を吹込み、

## 第21話 江戸幕府の衰運

大いに幕府の処置を非難したので、ついに青蓮院宮尊融法親王、太閤鷹司政道、左大臣近衛忠熙、右大臣鷹司輔熙、内大臣三條実萬らの奏上により、密勅を水戸の藩主徳川慶篤（斉昭の子）に下して幕府の違勅を責め、三家以下諸大名とも幕府を援けて、よく内政を整え、外侮を禦ぎ、天下を安んずるようによせよとお命じになるに至った。

### 直弼の大弾圧

これを聞いて直弼は大いに驚いた。尋常一様の事では、もはや幕府の威信を保つことは出来ないと彼は考えて、断然、非常手段に訴えて反対派を一掃しようと決心した。そこで、老中間部下総守詮勝を上京させて、条約締結の事情をつぶさに奏上させると共に、苟くも幕府の政治を非議したものは、悉くこれを処罰することにした。



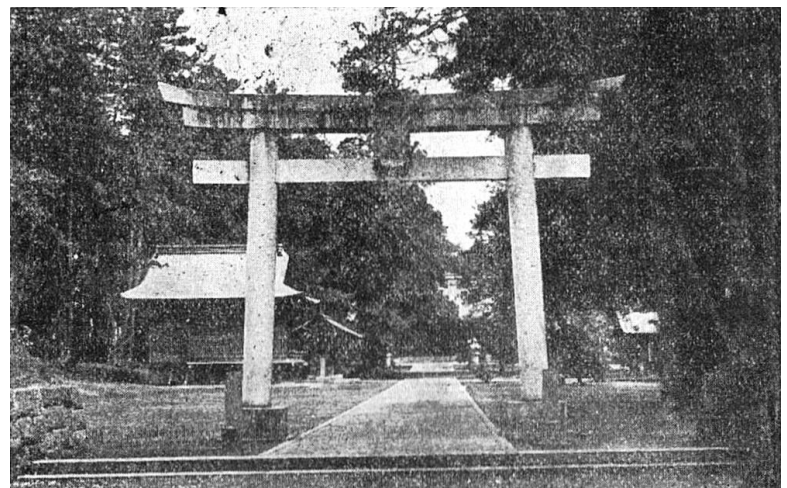
井伊直弼

こうして、尊融法親王は謹慎を命じられ、実萬、忠熙、政道、輔熙らは官を辞した上、髪を剃って謹慎させられた。梅田雲濱（名は源次郎、若狭小浜の旧藩士）、鞆銅吉左衛門（水戸の藩士）、その子吉（同）、小林民部（鷹司家の家司）、頼三樹三郎（山陽の子）らの志士 50 余人は捕らえられて江戸に送られた。この時、江戸でも日下部伊三次（薩摩の旧藩士）、安島帯刀（水戸の藩士）、茅根伊予之介（同）、橋本左内（福井の藩士）、らの数十人が捕らえられた。

この大弾圧のために反対派がその氣勢を殺がれたのは言うまでもない。彼等は一時全く手も足も出せなくなった。

### 安政の大獄

こうして、翌安政6年8月、直弼は、先の家茂擁立の際に、すでに一旦処罰して、或いは謹慎を命じておいた水戸の斉昭、慶篤、尾張の慶勝、越前の松平慶永、一橋慶喜らのうちから、更に斉昭には永蟄居を命じて水戸に退かせ、その子慶篤には差控を、慶喜には隠居謹慎を命じた。



東京 世田谷区 松陰神社 吉田松陰を祀る

又、土佐の藩主山内豊信にも謹慎を命じ、ついで藩士、志士、浪人らの断罪に及んで、斬り、或いは梟し、或いは切腹、或いは遠島、或いは謹慎禁固を命じた。かの吉田松陰もまたこの時に死刑に処せられた1人です。

松陰は先に秘密渡航を企てて罪された後、長州萩の自宅に蟄居させられ、後、有名な松下村塾を開き、多くの門人に兵学を教えていたのですが、この時、同志と謀って間部詮勝を暗殺しようとしたこと



が分かったのです。彼の門からは、高杉晋作、久坂玄随、伊藤博文、品川弥次郎らの維新前後の名士が多く出たので聞こえています。

なお、水戸藩士の京都における運動を助けて、首魁の 1 人とも目されていた詩人梁川星巖（美濃の人）は、同志が捕縛されはじめる 4,5 日前に病没し、梅田雲濱、日下部伊三次の両人は、獄中で病死したので、いづれも刑を受けるには及ばなかった。又、京都の清水寺の僧月照が、同志の西郷隆盛と共に薩摩に走って、相抱いて海に投じたのもこの時のことで、月照はついに死んだが、隆盛は、同船していた同志の平野國臣らに助けられて蘇生したのです。

世にこれを安政の大獄と言っています。

身はたとい武蔵の野辺に朽ちるとも とどめおかまし大和魂

吉田松陰

君が世を思う心の一筋に わが身ありとは思わざりけり

梅田雲濱



東京 千代田区

桜田門外の変

桜田門外の変

実に江戸幕府が始まって以来の大獄で、1 に大老井伊直弼の勇断で出たものですが、この辛辣な大手腕をもってしての大弾圧もなお、既に澎湃と波濤をあげてきていた時代の潮流を食い止めることは出来なかったのです。のみならず、彼に対する志士の憤りは、忽ち八方からその身に集まって、彼



## 第21話 江戸幕府の衰運

は怨みの焦点に立つに至ったが、尋いで、さきに水戸藩主に下した密勅を奉還させようとするに及んで、同藩士の極度の激昂を買った。

こうして、ついに萬延元年3月3日、上巳の節句のお祝いを將軍家に申し上げようと、將に江戸城に登ろうとした時、おりから降りしきる雪を幸いに、桜田門外に待ち伏せしていた水戸の浪士佐野竹之助ら17人および薩摩の浪士有村治左衛門のために、不意にその乗り物を襲われて刺殺された。時に直弼は46才でした。世にこれを桜田門外の変と言います。

直弼は文武の両道に通じて、見識も高く、その性質は豪気、果敢、よく一身をもってすでに実力のなくなった幕府を背負って立っていたのですが、今や忽ち斃れて、幕府の威勢は頓に衰えました。

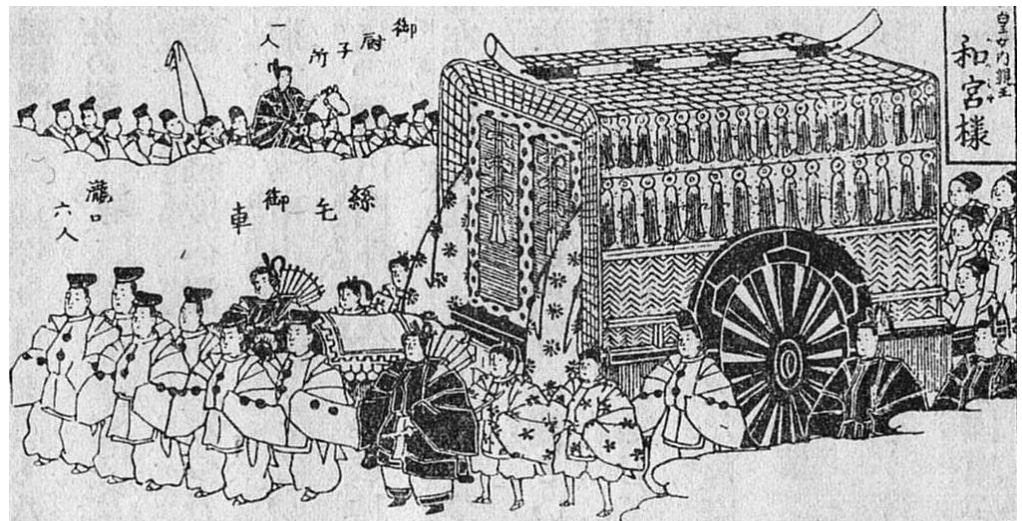
### 和宮の御降嫁

そこで、直弼の死後をうけて幕府の難局に当たった老中安藤対馬守信正らは、朝廷の尊厳を借りて国事を処理する外には、幕府の威信を恢復する道のないのを痛切に感じたので、ここに公武合体、(即ち公家と武家、朝廷と幕府の合体、)上下一致の策を立てて、將軍家茂に孝明天皇の妹君和宮親子内親王の降嫁を請い奉った。

しかし、和宮はすでに有栖川宮熾仁親王とご婚約があったので、朝廷はお許しにならなかった。幕府はなお熱心にお願ひして、この儀を聞き届け下さるならば、10年以内に必ず攘夷を実行しますと誓ったので、孝明天皇も然らばとこれを許され、翌文久元年10月、内親王は東下して、翌々月に江戸城に入られた。

### 坂下門外の変

ところが、当時の志士は尊王攘夷の一点張りで、一般に公武合体を喜ばず、却って倒幕論に傾いていたので、和宮の東下を大いに憤慨し、幕府が尤もらしい口実を設けて皇妹



和宮御降嫁の行列

を人質に取ったのだと言って、ますます幕府に反抗していた。ついに翌文久2年正月15日、水戸の浪士平山兵助ら6名の者が、信正の登城を坂下門外に要撃して傷を負わせるに至った。世にこれを坂下門外の変と言います。間もなく、信正は老中職を退いたが、幕府の威勢はますます衰えた。

### 寺田屋の変

一方、京都のほうには、このころ、諸藩の志士で藩を脱して集まる者がますます多く、これらの浪士は同志の公卿と謀って、さかんに攘夷、倒幕を唱えていたが、たまたま文久2年4月、薩摩藩主島津茂久

## 第 21 話 江戸幕府の衰運

(後の忠義)の父久光(斉彬の弟)が兵を率いて入京すると、志士らはこれを途に要して、幕府の罪を問い併せて攘夷を決行することを請うた。

しかし久光は、その軽挙を戒め、国論統一の急務を説いてこれを慰諭したので、志士らは久光は姑息で頼むに足らずとなし、急に事を挙げんとして伏見の旅館寺田屋に集まり、先づ佐幕派の関白九條尚忠らの邸を襲おうと謀った。薩摩の藩士有馬新七らもまたこの謀りに与ったので、久光は従士を遣って、これを諭して止めさせようとしたが、応じなかったのが、ついに従士は新七ら 8 人を斬り、その他を解散させた。最過激派の鎮圧の 1 つで、世に寺田屋の変というのがこれです。

### 薩長土の三藩の威望

こうして入京した久光は、朝廷から京都の鎮護を命ぜられたが、間もなく長州の藩主毛利敬親の世子元徳および土佐の藩主山内豊範もまた相次いで入京して、京都守護の命を拝した。これを見ても、朝廷と幕府との関係が、すでに頗る面目を改めて来ていることがわかります。幕府の本来のきまりからいえば、大名は直接には京都に入ることすら厳禁されていたのです。これから、薩・長・土の 3 藩の威望が俄かに隆々と高まって、その名声が天下に響いた。

### 幕府の衰勢

さて、朝廷は公武合体、挙国一致に就いての島津久光の建議を嘉納され、この年の 5 月、大原重徳を勅使とし、久光をその護衛として江戸に遣わしになり、幕府に将軍の上京および政治の改革を命ぜられた。家茂は謹んでこれを請けて、直ちに一橋慶喜を将軍の後見職として、松平慶永を政事総裁職としたが、ついで、会津の藩主松平容保を京都守護職に任じた。

又、諸大名の参勤交代の制を緩めて、これまで江戸に居らせた妻子の帰国をも許すことにした。嘗ては朝廷を圧迫して、政治の事に口出しはご無用とまで言っていた幕府が、今や朝廷の指図を受けて、政治の改革をしなければならなかったのみならず、諸大名を制馭する妙案といわれた参勤交代の制をも緩めて、その機嫌をとらなければならないようになったのです。何という幕府の衰え方でしたでしょう。しかもこの為、その衰勢を挽回する由も無かったのです。

( 第 21 話 江戸幕府の衰運 終わり。 次は前頁に戻り、第 22 話 攘夷の令と長州征伐 に )